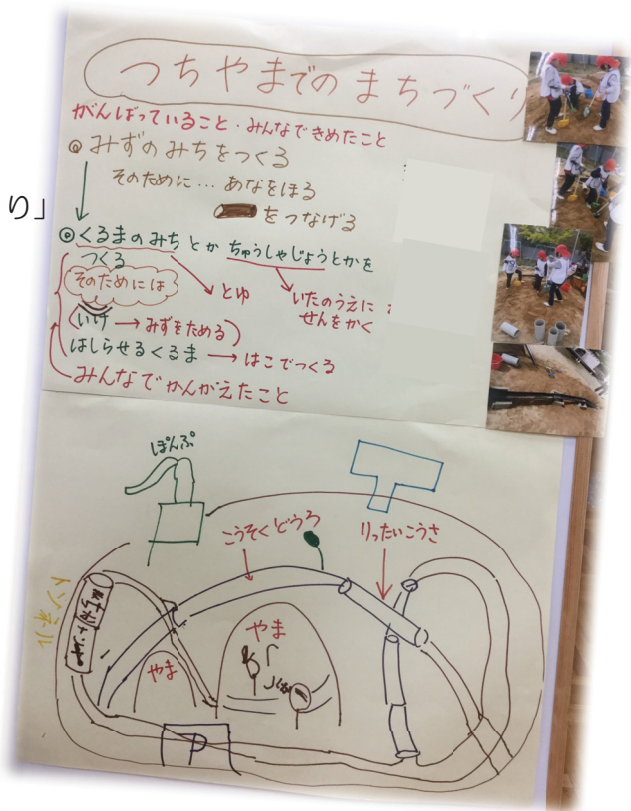




5歳児 11月~12月 「かいぞくせん」

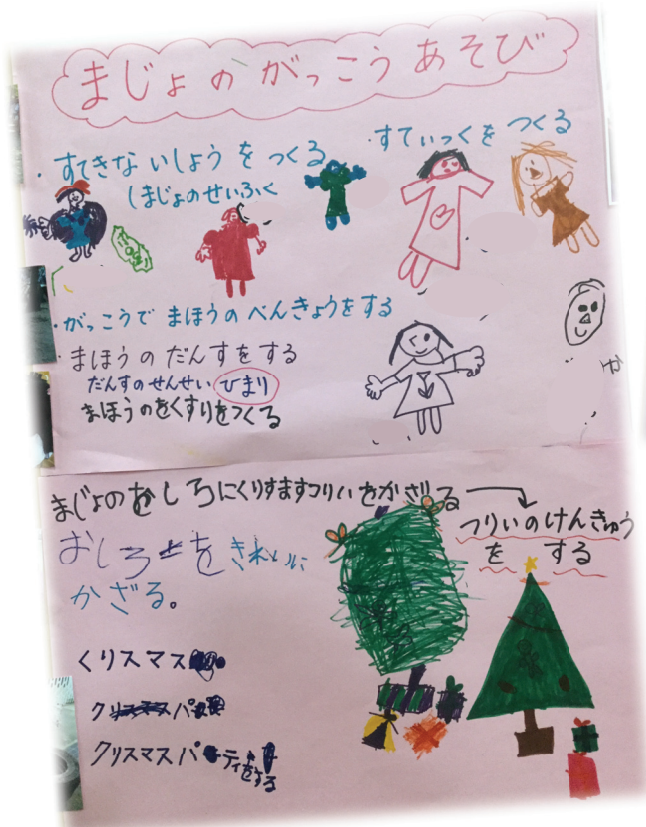
5歳児 11月

「つちやまでのまちづくり」



5歳児 11月~12月

「まじよのがっこうあそび」



(3) 子供自身の振り返りによる資質・能力の発揮，伸長を支える ICT 機器の活用

「資質・能力の発揮，伸長をとらえる（可視化する）取組（69 頁参照）」で前述したように，これまでも ICT 機器を使った取組を行ってきている。ここでは，本研究を推進するにあたって，新たに導入したスマートデバイスを使うことによって得られた効果の具体を示す。

遊びや生活の中での子供の発見や気づきを写真や動画で見て，その場にいなかった友達と共有する。さらに，その日の降園時に保護者に伝える時に，同様に言葉だけでは伝えきれないことを伝える際に，その日に撮影した写真や動画をすぐに使って伝えることができる。このことにより，自分自身で発見や気づきがあったその瞬間に感じている満足感に加え，友達や保護者から認められることによってその喜びはより大きくなる。これまでは，写真を大きく印刷する必要があったり，モニター等の機材の準備をしなければならなかったりしたが，タブレットを活用することによってそれらの準備をする必要がなく手軽に日常的に行うことができる。

そして，Bluetooth により，一人の教師が撮影した写真をケーブルで接続することなく，すぐにその場で共有することができる。そのため，複数のクラスが関係している取組についても情報の共有が容易であり，その日の保育中にすぐに活用することができる。保育中に携帯するのは小型の機器を携帯し，小型の機器で撮影した写真や動画を活用する時には，一度に画像を見る人数や状況に応じて画面の大きなタブレットで見るということも容易にできるのである。

また，時期の違いによる植物の変化や栽培している植物の生長の変化が分かるように以前の写真をすぐに提示し，その場で比較して見ることができる。

これらは，実際に使ってみると，子供の興味・関心に応じてタイミングを逃さずに活用することが格段に容易になっているのである。

3) 資質・能力の発揮，伸長を「発信する」取組

(1) 実践記録で子供の資質・能力の発揮，伸長を発信する

遊びや生活の中で，子供達は様々な友達と関わりながら，一人一人の子供に備わってる資質・能力を発揮し，それらが絡まり合いながら様々な学びに至っている。教師はその過程を自覚的にとらえつつ総合的に指導している。そして，それらの取組を実践記録で言語化している。

本研究は，この実践記録フォーマットを活用しており，日本全国の取組が寄せられている。ある場所の保育実践による成果が，時間と場所を超えて，別の場所での保育実践に生かされることになる。実践記録の目的と方法が共有され，日本全国の保育実践が集積され，いつでも振り返って見ることができることは，日本の幼児教育の底上げにつながっていくことであると考えられる。

全国の国立大学附属幼稚園が協力して実践事例を提供し、研究をするようになって3年目になる。今年は、さらに兵庫県下の本園の近隣の幼稚園等からも事例提供の申し出を得ることができた。そのおかげで、本研究において多岐にわたる幼児教育の、ある一定の範囲の指導方法を明らかにすることができたと考えている。

本研究で活用した実践記録フォーマットのように、共通の道具を使うことによって、共同して事例を収集し、保育実践を交流することのよさを実感したところである。このような輪がさらに広がり、日本全国のどの幼児教育施設からも優れた保育実践事例が集まることで、さらに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の項目の検証」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に至る過程」、「過程において有効な指導方法の明確化」等をも行っていけると考える。そのためには、一つ一つの事例の客観性が担保される必要があり、日本の各園、各地域における研修体制の確立が望まれる。

(2) ドキュメンテーションで子供の資質・能力の発揮、伸長を発信する

「遊びの中にこそ存在する豊かな学びを幼児教育関係者以外の人にも分かるように伝えたい。」この思いから、本園では、前述した詳細な観点による「カリキュラムで発信する取組」と、「実践を発信する取組」を行っている。主に保護者に向けて日々の実践を発信する際にドキュメンテーションを活用し、それらのドキュメンテーションは、園内で子供も保護者も見えるように掲示することに加え、ホームページにおいても本園の保護者が見られるように発信している。

ドキュメンテーションの具体は、既に「ドキュメンテーションの作成」及び「ドキュメンテーションの活用」で例を上げて示しているとおりである。このドキュメンテーションにおいても観点を明確にして示すことで、資質・能力の発揮、伸長を「発信する」取組にしている。

実際に保護者から、次のような感想が寄せられている。

- (ア) ねらいと観点を明確に表記しているので意図が分かり、自宅での生活に生かすことができる。
- (イ) 子供がどのように感じ、どのような気持ちで取り組んでいるのかが分かり、その気持ちに共感し、寄り添うことができる。
- (ウ) 一つの動きに対しても教師のいろいろな思いがあることに気付かされる。
- (エ) ただ単に楽しかったんだなという感想だけで終わるのではなく、子供達の成長や頑張りを感ずることができる。

ドキュメンテーションにおいて観点を明確に示す際に、本園では、自園のカリキュラムの観点を使用しているが、今後、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が広く活用されることで、同様の効果が得られると考える。つまり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の観点があることで、保護者に向けて、子供が資質・能力を発揮、伸長している姿を発信していく取組や、子供の思考の過程を保護者にも分かりやすく可視化する取組にしていけるのである。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」によって、小学校の教員と幼児期の終わりの姿を共有できることが期待されている。これまでも、幼稚園からは、指導要録において一人一人の個別の情報を提供してきている。今後も、一人一人個別の情報が必要であり、子供の興味・関心や姿の変容やその要因等、指導上参考となる事項については、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の観点を活用し、指導要録により、分かりやすく記述していくことが必要である。しかしながら、指導要録だけでは十分に幼稚園での遊びや生活を通した子供達の学んでいる姿が伝わっていない現状がある。

小学校へは、複数の幼児教育施設から子供達が入学していく。幼児教育の様々な現場から小学校に入学する際、指導要録だけでは、それぞれの幼児教育施設において、どのような遊びや生活を経験してきているのか分かりづらい。このことが、幼児期の子供の経験をその後の小学校教育において生かすことを難しくしているのではないかと考える。そこで、各幼児教育施設においてどのような遊びや生活を送ってきているのかを小学校と共有するために工夫することが必要になってくる。

そこで、本園では、指導要録に加えて、子供のために、そして保護者への発信のために作成しているドキュメンテーションを、指導要録とともに小学校に送ることで、幼稚園における子供の遊びや生活の具体の姿を小学校と共有するために活用しようと考えている。幼稚園の子供や保護者のために作成しているものが、小学校と情報を共有するという別の目的でも活用できるのである。

本園では、さらにドキュメンテーションを保育実践記録と共に、カリキュラム・マネジメントにも活用していく仕組みを構築した。本研究で取り上げている観点を明確にした保育実践記録やドキュメンテーションは、子供の評価、実践の評価、カリキュラム評価、保護者や小学校への幼児教育の成果の発信等、様々に活用することが可能なのである。